

をしれるにはあらず、

〔紫の一本下〕橋場渡し

隅田川の渡しとも云、江戸禪宗三箇寺總泉寺といふ寺、又淺茅が原、鏡が池も皆此近所なり、昔新田義宗武藏野合戦の時、足利打まけ、石濱迄引れたりと、太平記に見へたるも、此所なりといふ、

〔昆陽漫錄五〕石濱

橋場の法源寺に、○註 古き石碑どもあり、或人の云く、先年地中、その内の大同元年の碑に、砂尾石濱道場とあり、○註 按するに、今砂尾山不動院橋場寺と云ふ寺、橋場にあれば、古の砂尾石濱は、橋場なること疑なし、今橋場の土人、橋場を宿と云ふものあれば、古の奥州道にて、こゝより隅田川を渡り、石濱を宿としたるべし、○註 さて今を以て見れば、砂利場の近くなるゆゑ、古は隅田川石川にて、橋場は石濱とみゆ、橋場の川向の北の牛田本は丑田と云ふと云ところの悪水おとしの廣さ十間餘の川を、土人古隅田川と云へば、地變じて川の流、古と異なること明なり、○註 凡そ川の廣狹深淺緩急、變地によりてかはり、高岸爲谷、深谷爲陸なれば、古の石川、今は泥川となり、向ふ岸くづれて卑くなりたるべし、古は橋場より渡りて、川甚だ大きなるにや、又橋場は石濱ゆゑ、餘程石濱を往きて渡るにや、今は地變によりて、橋場より直に渡るにや、しるべからず、

〔江戸砂子二〕隅田川の渡 橋場の渡し共云す、だ村木母寺へわたる所、此わたしむかしの奥州街道と云、伊勢物語の、日もくれぬはや舟にのれと云しも此所なりとぞ、

〔御府内備考十三〕橋場渡

橋場より葛西領寺島村へ達する船渡なり、是古歌に詠せし隅田渡なりと云、正保改定國圖には、舟渡六十八間と注す、